

## P11 短期温泉浴と末梢血白血球の量的・質的調節 — 発酵温浴と温泉浴の比較 —

○松井健一郎、清水昌寿、山口宣夫（金沢医大血清学）  
大川尚子（財：石川天然薬効物質研究センター）

<目的>私達は免疫能の後天的調節法として、24時間～72時間内に代表される短期の温泉浴と末梢白血球の量的及び質的調節の可能性を検討してきた。今回、発酵温浴と温泉浴を比較し、各々の作用機作を知るため検討を行なったので報告する。

<方法>25～58歳までの健常者、延べ138名より温浴の前日と翌日同時刻に末梢静脈血を採取した。各種細胞の量的及び質的測定はいずれも蛍光色素結合モノクローナル抗体によるFACSscan法を利用し、リアルタイムに測定した。発酵温浴は大高酵素株式会社設営のイオンハウス（小樽）にて実施した。

<成績と考察>35歳を境界として若年層は減少的調節を、また老年層は増加的な調節を受けていた。この傾向は白血球総数及び亜群、即ち顆粒球、リンパ球そして単球において示された。36歳以上の老齢層では白血球総数、顆粒球それにリンパ球全般にわたって増加し、また35歳以下の若年層では逆に減少的な調節を受けていた。更に、顆粒球70%以上またはリンパ球40%以上の白血球偏向型ボランティアに対する調節はそれぞれの偏向が是正される様な調節が認められた。この様な調節はリンパ球の機能に対しても同様に示された。今回、これまでの調査項目に加えて、血液流動難易度をも精査した。その結果、測定前日において難易度に解離が認められた個体について、それぞれ適正化する方向の変動ベクトルが示された。